

「第4回 オープン！子ども・家庭大臣室 in 茨城」 ～子育てを支える「家族・地域のきずな」フォーラム茨城大会～

■開催状況

- ・日時 平成19年11月23日(金) 10:15～13:30
- ・場所 茨城県民文化センター(茨城県水戸市)
- ・出席者
 - 【大好きいばらき県民会議】
 - 幡谷浩史 理事長
 - 津久井一茂 県民運動推進委員会副委員長(総合司会)
 - 水野恵美子 県民運動推進委員会委員(第1分科会進行係)
 - 鈴木サカエ 県民運動推進委員会委員(第2分科会進行係)
 - 他 90名程度
 - 【茨城県】 泉陽子 保健福祉部長 他
 - 【内閣府】 上川陽子 内閣府特命担当大臣(少子化対策) 他

■次第

(1) いばらき夢のある家庭や子育てができる社会を築くシンポジウム

最初に全員で集まり、冒頭、起立して挨拶。その後、全体会スタート。

(幡谷理事長より)

- ・平成7年9月に大好きいばらき県民会議が発足しました。
- ・縦割りにある団体、企業、県を連携させ、これらを横糸で結んでいくことを目的としています。
- ・茨城県に住んでよかった、あるいは生まれてよかったとっていただき、やさしさとふれ合いのあるような町づくりを目指して、精一杯県民運動を実施してきています。
- ・地域社会の連帯感の希薄化などにより機能低下が懸念されている地域コミュニティの再生、活性化を図るため、平成16年度から、地域住民の皆さんとともに、自主的・主体的な地域づくりを支援する「ご近所の底力再生事業」を実施しています。当該事業の実施のための助成を要請した団体は1000件を超え、うち助成を行った団体は433件。参加者でいうと約42万人の方が、「ご近所の底力再生事業」に取り組んでいます。
- ・今後も精一杯、地域コミュニティの活性化に努めてまいります。

(大臣より)

- ・8月末に大臣を拝命して以来、子ども・家庭大臣室という形で活動を実施してきました。
- ・本日は、大好きいばらき県民会議のシンポジウムに参加させていただき大変感謝しています。



シンポジウムの意義を語る大臣

- ・本日のシンポジウムのテーマからすると、現在、国において取り組んでいる「子どもと家族を応援する日本重点戦略」の実践を茨城県が先駆けて行っていることの証左ではないかと思えます。私にとっては、本日は学ぶ一方の機会になると考えています。
- ・子どもを生んで育てることが幸せである、喜びである、そしてご自分の子どもでなくても地域のみんなで子育てを支えていく、そういう気持ちが表に出ていけば、その結果として、出生率の向上にもつながっていくものと考えています。

この後、下記の2分科会に分かれて議論をスタート。

第1分科会：子育てを支える社会（地域）の力

～私にできる子育て支援・私が欲しい子育て支援～

第2分科会：地域で育む生命の大切さ～新しく生まれる命・家族の絆～

はじめに第2分科会に出席

(鈴木委員より)

- ・人間は大昔から生きるために、命を繋ぐために頑張ってきました。日本でも大戦などがあり、生きたくても死んでいかなければならない人もいました。そういういろいろな困難な時代を乗り越えて、私たちは命を繋いでいかなければなりません。
- ・それが今は足踏みしています。しかし、こういう時代に足踏みをさせていいのか。皆さんは、どのような問題があって、結婚や子育てに悩んでいるのか。この点について、こう思うとか、こういう問題点があるとか、何でも結構なのでご意見をいただきたいと思えます。



参加者の発言に耳を傾ける大臣

(水戸市 茨城県看護協会所属 女性より)

- ・看護師が子どもを生んだ後の再就職先が、子どもの幼稚園に通う時間と勤務時間との兼ね合いで見つからず、生活に困るとい人が多いです。



(下妻市 男性より)

- ・息子はまだ結婚していないが、なかなか出会いの場がない。そもそも男女の出会いがないということが、新しい命を育む前提として問題です。国や県も検討して欲しいです。

(潮来市 女性より)

- ・近所が大切です。近所が子どもを守るべきです。
- ・三世代交流を4年前から実施しているが、集まる人が固定化しています。その他の人をいかに集めるのが課題となっています。

(筑西市 女性より)

- ・近所付き合いが少ないので、子どもを預けたくても預け先が近所にはありません。

(常陸大宮市 男性より)

- ・今の子育てを見ていると、否定からはじまっている気がします。少々の間違いがあっても、肯定して受け入れるべきではないでしょうか。

(石岡市 男性より)

- ・子どもにはお金と時間が必要です。

(静岡県静岡市 男性より)

- ・結婚を推奨することは重要ですが、出会いを前提としたパーティーには出たくないとの意見も多いです。

(水戸市 女性より)

- ・出会いを前提とした場には私も行きにくいです。
- ・茨城県青年の船事業に参加していますが、そこでいろいろな人と出会う中で、自らの会話能力やコミュニケーション能力の不足を痛感しました。
- ・男女の出会いでなく、イベントなどに参加していく中で、男女の出会いの前提となるコミュニケーション能力などを身につけていくことの方が抵抗感がないのではないかと思います。

(那珂市 男性より)

- ・学童保育をやっていますが、家庭でできないことや地域ではできない経験をさせてあげようと各種の取組みを実施しています。
- ・特に最近の子どもは自然体験が少なく、また上下関係、異年齢との体験も少ないので、その点を特に重視しています。

第2分科会から第1分科会へ移動

(東海村 男子高校生より)

- ・東海村高校生会という団体に所属しています。
- ・最近では野外で遊ぶところが少ない。安全な子どもの遊び場が必要です。

(日立市 女性より)

- ・日立市には子ども広場がありますが、市の財政難から存続自体が危ぶまれる状況です。
- ・子育てのお母さんたちの悩みを聞くと、子育て情報の入手方法や悩みの相談場所などがわからない状況です。しかしそれを解消するための活動をしようにも、活動場所が狭められ、子育て支援活動が非常に困難な状況に置かれています。



子育て支援の現場の声を聴く大臣

(日立市 女性より)

- ・親が子どもを愛おしいと思って育てられるような支援が必要です。

- ・未来を育てていく子どもたちなので、国の制度がしっかり保障した上で、子育て中だから職場の人もいいよ、だから頑張る、と応援できるような社会でなければならないのではないのでしょうか。

(女性より)

- ・開放学級をやっていますが子どもの預かりは8時30分からになっています。仕事に行く時間を考えたら、とても開放学級には子どもを預けられない状況です。
- ・延長保育も6時までということが多く、6時30分にしか帰れない人にはとても子どもを預けられません。

(千葉県八千代市 女性より)

- ・日本の場合、制度ができているにもかかわらず、仕事と生活の両立ができていない人が多いです。
- ・仲間の職場の男性が育児休業をとりましたが、まわりにそうした例が少ないせいか、育児休業取得男性への支援が足りません。子育てに行き詰って子育て教室に行っても参加者は若いお母さんばかり。しかも授乳している姿を見ていたたまれなくなり、次回から参加できなかったとの話を聞きました。
- ・公園デビューも同じですが、企業も地域の人も男性の育児参加について理解を深めていくことが必要です。

(東海村 女子高校生より)

- ・東海村高校生会に所属しています。
- ・学童保育所に頼りすぎているお母さんが多く、子どもが家族といっしょに過ごす時間が減っているのではないかと思います。
- ・今日のシンポジウムは、お母さんの視点からのお話だったが、子どもである私の目線では分からない問題であることがよく分かりました。

各分科会の終了後、再び全体会。各分科会の進行係から総括が行われた。



進行係の総括を聴く大臣

(第1分科会水野さんより)

- ・子育て支援にあたっては、場、交流、情報伝達が必要です。特に、場については行政の支援が必要です。
- ・行政だけでなく、市民団体が頑張ろうとしている人にとっても、その場、その場に対応した適切な協力が必要です。
- ・ボランティア活動であっても情報伝達を適切に行うことができない場合は、うまくいかないことが多い。このため、お互いに協力しあっていくことが必要ではないかとの意見も出ました。
- ・制度を画一化していくためにも、皆が声を出し合い、皆が協力しあわなければいけないのではないかと、というのが第1分科会としての意見です。

(第2分科会鈴木さんより)

- ・男女の出会いの場の創設以前にコミュニケーション能力の欠如が問題です。

- ・結婚に二の足を踏む要因として経済的な問題や仕事の問題も大きいため、これに対する支援策も必要です。
- ・看護師が子どもを生んだ後、職場復帰するのが、困難な職場環境もあります。
- ・異年齢の子どもたちが出会って一緒に活動したり、自然にふれる体験活動をさせたり、三世代交流の推進も必要です。
- ・今後も国に様々な支援を行っていただきたいが、若い人たち同士が、地域から情報発信していきたいとの前向きな意見もありました。

最後に、上川大臣から講評が行われた。

- ・本日は熱心な意見をいただきありがとうございました。ご一緒させていただいて、いくつか大変印象深い言葉を発見しました。
- ・子どもの目線で今まで考えてきたけれども、大人目線ということに初めて触れたという女子高生の声。これは大人目線で見ていた世界を子どもの目線で考えてもらいたいという主張でもあると思いました。また、預けっぱなしで、子どもが家族と過ごす時間がすごく減っているのをどう考えたらいいのかという指摘もありました。これは、親の都合で子どもとの会話の時間が不足してしまい、本末転倒な結果になるのでは、との問題意識だと思います。今後、子育て支援施策に取り組んでいく中で、子どもの視点に立って、それがいいのか悪いのかということ、あらためて見直していくことが大切であると思いました。
- ・未婚の息子をお持ちのお父さんから、何とかお嫁さんが来て欲しい、お孫さんも見たいという切実な思いを、しかもお父さんの口から直接聞かせていただきました。結婚、第1子、第2子、第3子など、各ステージごとに様々な課題があるわけですが、結婚のハードルについては、結婚する相手を見つける場所がないこと、安定した職業がないと家族を持って子育てをすることにためらいがあること等が考えられます。
- ・仕事と育児の両立支援については、本日の議論の中でもあったように制度はかなり整っています。それを実際に活用している人は、女性に偏る傾向があります。男性の育児休業取得率は著しく低く、これを改善し働き方の見直しをしていくためには、企業の協力と職場の意識を変えていく必要があります。
- ・ワーク・ライフ・バランス、仕事と生活の調和。これは家庭生活のみならず、地域の一員として地域に貢献をしていただくことが大事です。政府は現在、仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)の憲章と行動指針の策定に向け、最後の仕上げを行っているところです。
- ・社会全体として働き方の見直しに向け国民全体が取り組んでいくことが必要であり、大好きいばらき県民会議にも、ぜひこの運動に参加をいただいて、一緒に取り組ませていただきたいと考えています。
- ・お金でモノやサービスを買ったりしている中でも忘れられがちな愛情とかきずなとか、そういう土台となるものがなければ、いくら制度を充実したとしても、子どもは健やかに成長することができず、将来の社会の担い手として、いきいき活躍していただくことができないと思います。今後とも皆さんの前向きな気持ちを国民運動として展開していただけるよう力を貸していただきたいと思います。
- ・その結果、茨城県の出生率がどーんと上がっていくことを期待しています。



国民運動の展開・発展を
呼びかける大臣

(2) 親子ふれあいコーナーの視察

大会で、基調講演や分科会のほか、家族で参加・体験し、多世代の人たちと触れ合える親子ふれあいコーナーが設けられ、大臣は視察を行いました。



「おはなし広場」で子どもたちと触れ合う大臣



赤ちゃんを抱き上げる笑顔の大臣

■大臣からのメッセージ

～平成19年度子育てを支える「家族・地域のきずな」フォーラム茨城大会への参加を終えて～

「家族の日」に富山県を皮切りに開催された「家族・地域のきずな」フォーラムの第2回の大会が茨城県で開催され、私も参加をさせていただきました。

今回は特に午前中開催されたシンポジウムに参加をさせていただき、現場の生の声を数多く聞かせていただきました。その際印象に残った言葉は前述のとおりですが、特に、今後の子育て支援策を推進していくにあたっては、子どもの視点が必要であるという女子高生の方の発言を重く受けとめました。大臣に就任して3か月が経ちましたが、今後、子育て支援策を考えるに際しては、子どもの視点に立つことを常に銘記していこうと決意をあらたにしたところです。

最後に、このようなフォーラムを開催するにあたって多大なご尽力をいただいた茨城県をはじめ、多くの県民の皆様に心より感謝申し上げます。



子育て支援策への決意を述べる大臣

(以上)